

## 新刊

□神奈川県植物誌調査会（編）：神奈川県植物誌 2001 1,584 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館。¥9,800+1,200（送料）。

神奈川県植物誌1988の改訂版である。前版より100頁以上も増えている。図が増え、分布図がより正確になり、種の解説もより詳しくなっている。解説のなかには種の分類を詳細に検討していて、独立した研究報告として発表すべきではないかと思われるものもある。このことが頁数が増えていることと関連している。地方の植物誌としてはこれ以上のものは望めないだろう。連絡先は、〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499。（山崎 敬）

1988年に刊行された神奈川県植物誌1988は、当時ようやく利用が拡がりはじめたパソコンによるデータベースを基とし、加えて分布図はおろか版下までパソコンで自作するという、わが国のフロラ研究史に一時期を画する作品だった。その結果1994年には2500部を完売し、在庫切れになったという。本書はかねてから準備されていたその改訂版である。今回も予算の制約のため、版下はすべて自作し、その結果前版と同じ価格に抑えることができたという。表に出ない当事者のこういう努力は、はかり知れない。改訂と言っても、フロラの部分はすべて新たに書き直され、図も前版のものと共に多くの追補が行われている。フロラの部分の頁数だけをくらべれば、1988年版では1271頁、2001年版では1436頁と、さしたる増加はないように見えるが、行間が圧縮され、図もやや縮小してコンパクトに配置されているので、記述内容ははるかに多くなっている。前版で多く使われていた標本のシルエットは、今回は線画に差し替えられた。分布図については、町村界を示す前版と同じ地図パターンを使っているものの、分布点が前版では地区につき一点だったものを、三次メッシュによる表示に改めた結果、より精細な表現となった。これに加えて記録時期によって三種類のマークを使い分け、分布の変遷を示す試みがなされている。もっともその為に少々見づらい反面もある。地図パターンが同じと言っても、今回のものは国土地理院数値地図による描画である。標本の引用は原則として省か

れているが、県内に基準産地があるものや、特記すべき種類については示されている。1988年版にあった、気候、地形・地質、植物季節、文献目録は省かれ、研究史、県を基準産地とする植物の項が残っている。研究史には加筆のあとが見られ、基準産地植物のリストは新たに書き替えられている。文献目録は研究史の一部として前版以降のものが示されている。

神奈川県には県立博物館をはじめ地域博物館、資料館、植物園などの施設が多く、それぞれ研究者が活動しており、他地域にくらべて恵まれていて、それらが活動の基盤となっているのはうらやましい。しかし特筆すべきことは、それらの機関が緊密に連携し、一般の同好者を取り込んで、地道な現場調査、標本収集、記録のまとめなどを行う組織を作り上げ、維持してきた結果が、今回の改訂版につながったことである。今日では自然環境調査などの関係で、こういう県単位の活動の機会はどこにでもあるが、それが恒常的な組織化にはなかなかつながらない。神奈川県植物誌2001は、こういう面からも参考評価されるべきだろう。連絡先：250-0031 小田原市入生田 499, TEL 0465-21-1515 ex 620. FAX 0465-23-8846. E-mail. tabuchi1953@aol.com（金井弘夫）

□van den Hoek C. and Chihara M.: A Taxonomic Revision of the Marine Species of *Cladophora* (Chlorophyta) along the Coasts of Japan and the Russian Far-East. 242 pp. 2000. National Science Museum Monographs No. 19. National Science Museum, Tokyo.

藻類学の碩学 van den Hoek 先生をご案内して2人で八丈島に採集に出かけたのはもう11年前にもなる。以来ずっと心待ちにしていた本書が国立科学博物館より発刊され、ここに手にすることができ感無量である。八丈島で私が採集してお見せする度に先生が教えてくれたシオグサ類の学名はほとんど忘れてしまっていたけれど、本書により記憶が取り戻せることが何よりうれしい。

シオグサ属藻類は海水から汽水を経て淡水

まで、幅広い塩分環境に生育できる生物群である。淡水産のシオグサ類の代表はマリモである。藻類では、海藻と淡水藻にはっきりと分けられることが多いなか、このようなグループは稀である。現在まさに淡水に生育の場を広げている仲間なのかも知れない。そのうちの一部は海と陸の境である汽水域に残って生育しており、それらは「汽水藻」というあらたなグループに当てられる。現在、河口や干潟などの環境が自然の重要な部分であるという認識がなされるようになり、この汽水域に特有に生育する藻類はこれまた重要であるといえる。当然ながらシオグサ類も汽水藻の重要構成要素となっている。

本書は日本近海に産する海産シオグサ属 30 種を扱っている。これには 6 新種、2 変種、日本新産種 11 種が含まれている。日本各地の標本庫から貸し出された標本、新たに採集された標本、また著者自ら採集した標本を含めた膨大な標本のデータに基づいて完成されたもので、その精力には全く脱帽である。

前半部分では、シオグサ属内及びその類縁属との系統を論じている。これらの仲間はいずれも分枝糸状体であり体制は単純であるが、その系統はそれほど単純ではないと思わせる。さらに、前半部分の 10 頁を割いて、著者が得意とする海藻分布論を展開している。その手法は、種の生存最低水温と最高水温による分布限界の設定である。日本のような南北に長く、さらに水温較差の大きい地域では大変説得力のある分布論となっている。他の藻類群に適用してもクリアーな結果が得られそうである。筆者も本稿を書きながらコンブ類やホンダワラ類でやってみようと考えている。後半の 200 頁におよぶ本体部分で、30 種すべての、命名、記載文、生態、分類、分布、標本データが詳細に書き連ねられている。細心かつ大胆という印象をもつ本書は、形態に基づくシオグサ類分類の 21 世紀のパラダイムとなろう。

そのうち私的に思い入れのあるいくつかの種について述べる。

1) チャシオグサの学名は *Cladophora wrightii* Harvey 1859 といって、幕末に米国から来航した黒船が、静岡県下田市沖に停泊中に付近の沿岸で採集していった海藻のひとつであり、

はるばる英国に運ばれて新種として記載されたものである。その時の採集者が C. Wright 氏であったので、この種小名がつけられている。実はこのときの採集品の中には他にも多くの日本特産の海藻が混じっており、「ヒジキ」も「ワカメ」も「オオバモク」も下田がタイプロカリティーである。私などはいまだにこのことでは悔しい思いをいだいているのだが、時代錯誤であろうか。

2) *Cladophora conchophera* カイゴロモは潮間帯に生育する巻き貝であるスガイに特異的に付着する体長 1~2 mm の小型のシオグサである。このような移動する基質に付着するためには、他の仲間とは全く異なる生理特性を持たねばならない。スガイの形態や行動と歩調を合わせて進化した何とも不思議な海藻におもえる。淡水のシオグサで亀の甲羅に房状に生育する藻類を研究したことがあるが、「なぜそこに生えていなくてはならないの？」と亀とシオグサに向かって、つい独り言を言ってしまったことが思い出される。カイゴロモの細胞内構造を調べた結果では他のシオグサ類とはずいぶん異なっていることが判った。今後の系統や分類に関する研究が待たれる。この種の記載に関して本書で一つだけ残念なのが、種名のミススペルであることを申し添えておく。

3) 冒頭で述べた八丈島で採集した種が *Cladophora coelothrix* (日本新産種)、*C. catenata* カビシオグサ、*C. sibogae* ネダシシオグサ、*C. albida* ワタシオグサと、本書の最後に新種記載されている *C. oligocladoidea* van den Hoek & Chihara である。この新種は Hoek 先生が八丈島東海岸の底土で採集した標本がもとになっている。先生はシオグサを採集すると即座に同定し、遺伝子の解析用に管瓶に入れ本国に送っていた。とにかくやることなすこと速攻で、その効率の良さは見習うべきだとほんとに感心した。先生と一緒に泊まっていた民宿で、祭りのため地元の人たちが集まって八丈太鼓の練習になり、誘いにのって太鼓をたたいたが、とても恥ずかしそうだったことや、畳の上で寝るのが初めての経験で、母親に見せるので布団に寝ている姿を写真に撮ってくれと言っていたのが思い出される。

(東京水産大学 田中次郎)